

季刊

BEST DOCTORS IN JAPAN™

第66号 2024年 10月

今月の
ベストドクター

順天堂大学医学部 大学院医学研究科
泌尿器科学主任教授

堀江 重郎

ロボット支援手術の実績を重ね 男性医学や抗加齢医学の領域も開拓

ロボット手術が最も普及している泌尿器科の領域では、診断や治療方法が大きく変わってきている。
日本の泌尿器科医療をリードする堀江重郎先生に現状とこれからを伺った。



順天堂大学医学部 大学院医学研究科
泌尿器科学主任教授

堀江 重郎 ほりえ・しげお

1985年東京大学医学部医学科卒業、同年東京大学医学部附属病院救急部入局。1986年同泌尿器科助手を経て、1988年より米国テキサス大学で腎臓学の研究、移植医療に従事、米国医師免許取得。1995年国立がんセンター中央病院泌尿器科、1998年東京大学医学部講師、2002年杏林大学医学部泌尿器科学教室助教授、2003年帝京大学医学部泌尿器科学教室主任教授、2012年より現職。現在、デジタルセラピューティクス学、遺伝子疾患先端情報学教授も兼任。日本泌尿器科学会指導医、日本腎臓学会指導医、日本癌治療学会暫定教育医、日本内視鏡外科学会腹腔鏡技術認定医。
日米で医師免許を取得し、前立腺・腎臓・膀胱のロボット支援手術では国内トップクラスの執刀経験を有し、機能を温存した低侵襲の手術の普及に貢献してきた。男性に特化した医療「メンズヘルス外来」を日本で初めて立ち上げるなど、日本の泌尿器科を牽引している。著書に『LOH症候群』（角川新書）、『二階から目薬』（かまくら春秋社）などがある。

泌尿器科はもはや マイナーな診療科ではない

泌尿器科では、ホルモンに関する臓器（副腎）や、尿路に関する臓器（腎臓から尿管、膀胱、尿道）、男性生殖器（精巣、前立腺など）に関わる病気まで幅広い範囲を扱う。「泌尿器」とは分泌の「泌」とおしっこ「尿」を組み合わせた造語という説がある。順天堂大学で泌尿器科学の主任教授を務める堀江重郎先生は、従来の泌尿器科の分野はもちろん、新しい試みも取り入れ、多くの疾病の治療や悩みの克服に貢献してきた。

そんな先生のキャリアの始まりは、いささか特殊だ。卒業後は救急部に所属。当時は国家試験合格後に即入局が当たり前だったが、先生は専門がはっきり決まらずに悩んでいたとか。そこでたまたま救急部に話を聞きに行った際、「明日から来なさい」と言われた。

「後で知ったのですが、救急部にはいわゆる“ならず者”が集まっていました。腕に自信のある、個性的な先生方ばかりです。当時の救急部は、年間250人が心肺停止の状態で搬送されてきました。当然命がかかっていますから指導も厳しくて、鍛えられましたね。ものすごい集中力で日々奮闘していましたよ」

救急部で1年勤務したのち、当時最先端の治療法だった腎臓移植に興味をもち、泌尿器科へ入局。留学の話がもち上がり、テキサス大学で腎移植を学ぶことになった。細胞培養など腎臓機能の基礎研究を手がけながら臨床の現場で腎臓移植に携わり、アメリカの医師免許も取得。約3年間の留学を終えて東大に戻ってからは、年間500例ほどの手術を担当した。その後、杏林大学で腹腔鏡の技術を学び、帝京大学でロボット手術を始めるなど、さまざまな技術の修得にも余念がなかった。

「泌尿器科に携わって38年になりますが、この分野の発展は特に目覚ましいです。泌尿器科では現在、ロボット支援手術などの技術と薬物治療の二つのイノベーションが、加速度的に進化し続けています。私が泌尿器科に入った頃は、『日本人は前立腺がんにならない』と言われ、性病を中心に診るマイナーな科と認識されていましたが、今は違いますね」。2015年以降、ほとんどの年で前立腺がんは日本人男性に最も多いがんになった。泌尿器科では、がんから良性疾患まで幅広い疾患を扱う上、男性医学、在宅医療、アンチエイジングなど、さまざまな研究分野が広がっている。「もうマイナーな診療科とは言えませんね」

ロボット支援手術の 恩恵を受けやすい泌尿器科

アメリカで開発された遠隔操作型の内視鏡下手術支援ロボット「ダヴィンチ」は、2009年に日本で認可されて以来、約600台（2023年6月時点）の導入が報告されている。2012年の前立腺がんに始まり、2016年に腎臓がん、2018年には肺がんや胃がん、2020年には膵臓がんや食道がんなど、ロボット支援手術で対応可能な疾患が増えているが、実績が最も多いのは泌尿器科だ。泌尿器科では、骨盤や腹部の奥にある腎臓や膀胱、前立腺などの狭くて深い場所での手術が多い。従来の開腹手術よりも格段に細やかな操作が可能となるため、ロボット支援手術のアドバンテージを強く生かせる。

堀江先生がダヴィンチを使い始めたのは2011年12月。アメリカの複数の施設でトレーニングを受け、ロボットを駆使した精度の高い泌尿器手術の技術を習得した。



カンファレンスでは、各ドクターたちが積極的に意見を交わす
(写真提供：順天堂大学泌尿器科学講座)

「ロボット支援手術に必要なのは、空間認知能力です。お腹の中でつながっている臓器をいかに立体的にイメージできるかが重要で、これはセンスによるところも大きい。そのため、研修に来た学生に絵を描いてもらい、平面的な絵を描くか、立体的な絵を描くかによって、内科系か外科系どちらに適性があるかの参考にしています」

2012年より先生が所属した順天堂医院泌尿器科グループでは、建築で使われる^{キャド}CAD（コンピュータ上で図面を作成するツール）を医療に応用した3Dセグメンテーションをロボット手術に取り入れた。安全かつ正確な、患者さんに負担の少ない手術を開発したことで、順天堂はロボット支援手術の件数で国内有数の病院となった。なかでも泌尿器科では、腫瘍に関する手術のほとんどにロボットを使っている。

「以前は腫瘍を可能な限り取ろうとすれば、大きく切除することになり、大量出血や合併症のリスクがありました。現在のロボット支援手術は必要最小限の切除で済むため、患者さんにとって負担がかかりにくくなったのです。もう一つ大事なことは、再現性とトレーニングですね。私たちが若い頃は、高い椅子に上って、周りからのぞき込まなければ、手術の様子を見ることができませんでした。それがロボット支援手術なら、すべて3D映像で録画して見られます。それだけでなく、世界中の人と共有し、技術の向上に役立てることもできるのです」

会話や笑いが 治療の効果を高める

治療の進化もさることながら、がんに打ち勝つには、人との絆やコミュニケーションもそれと同じぐらい大切というのが、先生の持論だ。

「がんになると、多くの人はほかのことを我慢して治療に専念します。でも、真正面からがんに向き合ってもなかなか消えないのに、自分のことを優先しながら過ごしていると、転移していたがんが消えることが実際にあるんです」

1989年、医学雑誌『ランセット』に、米スタンフォード大学で行われた、ある研究結果が掲載された。転移がある乳がんの患者さんを無作為に2つのグループに分け、片方は抗がん薬治療（当時の標準治療）を行い、もう片方は抗がん薬に加えて、患者さん同士が集まって毎週1回90分間、会話する機会を設けた。2つのグループを比較した結果、前者の平均余命は18カ月だったが、後者のそれは36カ月、つまり2倍の差が生まれたという。「その理由が近年になって、テロメアという染色体の末端の長さに関係することが分かってきました。長時間強いストレスを受けるとテロメアは短くなり、老化が進行してしまいます。一方、ゆったりした気分だと、テロメアは長くなる。仲間と集うことでストレスを軽減できるということです」

また、予後が厳しいと思われる状態が改善する患者さんには、ある特徴があるそうだ。

「治療のスケジュールを決めるとき、『その日は友人との約束があるので、他の日にしてください』といった具合に、自分の予定を大事にする人は治りやすいです。治療を優先する人が圧倒的に多いですが、日々の生活は変えないほうが良い経過をたどっているように思います」

さらに笑うことにも効果があるそうだ。先生は、ノーマン・カズンズ^{*}というアメリカのジャーナリストの体験（コメディ映画を観たりジョーク本を読んだりして笑っているうちに、難治性の病気が治った）を元に、患者さんに「なるべく笑ってください」と言い続けている。入院中もずっとお笑いの映像を観ていた患者さんが、抗がん薬を約3年間続けた後で寛解した例もある。また、先生は患者さんの家族に「親孝行しなさい」とアドバイスも欠かさない。親子で過ごす時間を楽しむことで、がんが消えることもたまにあるそうだ。

「標準治療は科学的根拠に基づいた治療法ではあるものの、万人にそのまま当てはまるわけではありません。年齢や体型、全身状態などにより、ガイドラインで推奨されている治療が高リスクになる場合もあります。そのため、あえて標準治療以外の治療を考慮することも選択肢の一つです。これからは医療も多様化が進み、一人ひとりに寄り添ったオーダーメイド医療が広まっていくのではないのでしょうか」

先生は問診を大切にしているが、それには二つの意味がある。一つは、患者さんの状態を判断する際、自覚症状がどの程度あるのかを、本人から語ってもらう



ダヴィンチを使う堀江先生。座りながら操作が可能



手元のコンソールを操作して手術を行う。術者と患者両者の負担が軽減される



ため。もう一つは、問診自体が信頼関係を構築するためだ。

「特にがんの治療では、副作用で辛い思いをしたり、同じ治療でも効果に個人差があったりします。また、腫瘍マーカー検査や画像診断に頼った診療では、患者さんはがんが小さくなったら喜び、大きくなったらがっかりしがちです。直接患者さんに会って、会話のキャッチボールをしながら状態を見ていくことが重要ですね」

日本初のメンズヘルス外来

更年期障害は女性特有のものと思われがちだが、男性の更年期障害（LOH症候群）も存在する。男性ホルモンの低下によって不調が引き起こされるもので、堀江先生はその診断と治療も専門にしている。

「男性ホルモンのテストステロンは、狩りに出かける『意欲』、獲物を捕まえる『認知力』、移動する『体

力』を支えるホルモンです。さらに獲物を捕まえて他者から『承認』されることで、ホルモン値が上がると考えられています。テストステロンのピークは20～30代です。あとは加齢に伴って緩やかに減少していくのが一般的ですが、個人差が大きいですね。テストステロンは、自分が置かれている社会環境に大きく影



手術室には複数のダヴィンチを導入している



研修生にロボット支援手術の指導を行う堀江先生



堀江先生は、各スタッフとのコミュニケーションを大事にしている

響を受けることも分かっています。体調がすぐれず、意欲の低下、不眠などうつ病に似た症状のある人を調べると、多くの場合、テストステロンが減少しているのです。今年、経済産業省の調査により、健康問題が理由で労働生産性が低下している『プレゼンティーズム』の程度が、更年期の症状と一致していることが分かった。「テストステロンを保つためには、自分の存在が認められるコミュニティをもち、その中で自己実現をしていくことも重要です」

女性の更年期と比べるとあまり知られていない男性更年期障害について、本人はもちろん家族や周囲の人にも知ってほしい。その思いから先生は、メディアや講演会を通じて、更年期をすこやかに過ごすには、「今の自分自身を認める」「身近な人や専門家と対話する」「正しい情報を得る」ことが大切だと伝えている。

在宅診療所を立ち上げ 多発性嚢胞腎の協会も設立

以前から在宅医療の問題にも取り組んできた堀江先生は、東京都北区で在宅診療所を立ち上げた。大学病院などの高機能病院で標準治療が終了して、積極的な治療ができなくなった患者さんは、「地元の先生のところに行ってください」と言われ、治療から切り離されてしまう。そういった「がん難民」の問題を解決できないかと考えたのがきっかけとなり、泌尿器科のメンバーが作ったものだ。在宅診療所では、医師や看護師が、医療機関への通院が困難な患者さんを定期的に

訪問し、診療や看護をする。しかし、当初は「大学病院とは治療環境が違いすぎる」「泌尿器以外の疾患をどう診るのか」といった反対の声もあったそうだ。

「メンバー全員の心が一つになったのは、とある患者さんが来られたのがきっかけです。その方はがんが全身に転移し、先が長くないと診断されていました。病院では居心地が悪そうでしたが、在宅医療に移行してからはのびのびと過ごされ、家族が交代で面倒を見てくれたこともあってか半年ほど生きられたんです。亡くなった悲しみはあっても、みんなで見送ることができたという感情が生まれ、ご親族からものすごく感謝されました」

在宅医療の現場に行くと、病院の診察室とは違って頭を下げて患者さんの家に入ることになるので、医師も診察室にいる時より腰が低くなる。また、医療機器が少ないので画像や検査値などの情報には頼れない、話したり触れたりという具合に、丁寧に問診をするしかない。こんなところにも会話や問診を大切にしている先生の姿勢がよく表れている。

2021年4月には、「多発性嚢胞腎協会」を設立。遺伝的疾患である多発性嚢胞腎（ADPKD）は、先天的な病気としては数が多く、約2,000人に1人の割合で発症し、患者数は全国で約30,000人に上る。

「未知のことが多かった多発性嚢胞腎の原因や発症のメカニズムが徐々に分かってきたんです。アメリカとの共同研究も行い、薬剤の開発や治療に関われたのは非常に有意義でした。この協会を設立した目的は、

全国に多発性嚢胞腎の治療ができる医師を増やすことと、患者さんと医師、看護師、薬剤師がフラットに交流できる場を設けることです。そのため、全国各地で活動しています」

専門は一つではなく 二つ、三つあってもいい

順天堂医院の泌尿器科のモットーは、「最高の技術、最新の設備、最善のケア」を追求すること。患者さんの人生に伴走し、患者さんが望む医療の提供を目指している。

堀江先生の考える名医像について尋ねてみると、次のような答えが返ってきた。「やはり、最高の技術を持った人でしょうか。技術を高めるためには、それなりの経験が必要です。また、一つのことを極めるのも素晴らしいですが、それ以外のいろいろな経験、幅の広さが必要かなと思います」

泌尿器科全般の診察と手術、腎臓の難病治療開発やコミュニティ作り、メンズヘルスやアンチエイジングの専門診療、さまざまな学会活動。幅広く医療に携わっ

ている先生は、その時々ニーズに合わせて自身の専門を増やし、それぞれの発展に貢献してきた。

「専門は一つではなく、二つか三つあってもいいんです。そうすると、それぞれの分野で出会う人も違うため、別の人脈ができて考え方にも柔軟性が生まれます」

日本抗加齢医学会や日本抗加齢協会の理事長を務めるなど、アンチエイジングに関連した活動も多い。自身でも、一定期間食事を制限するファスティングを実践している。

「ファスティングは内臓と腸内細菌を休ませ、腸内環境を改善し、体の機能を高めることにつながるといわれています。そのほかにも、医学的なアプローチで人間の体を若返らせることが可能だと分かってきました。これからは医学的・科学的に正しいアンチエイジングの考え方、知識を広く啓発し、多くの人が健康で充実した人生を歩んでいただけるようサポートしていきたいです」

常に探求心を持ち続け、意欲的に取り組む先生の挑戦は、まだまだ尽きないようだ。🌐



泌尿器科のスタッフ一同。「最高の技術、最新の設備、最善のケア」をモットーに日々患者さんと向き合う（写真提供：順天堂大学泌尿器科学講座）

お知らせ

日本におけるベストドクターズ®・サービスは日本総代理店である株式会社法研により運営されています。

● 株式会社法研 (ベストドクターズ・サービス日本総代理店)

法研は1946年に設立され、社会保障の情報発信事業を起点にその領域を拡大し、健康・医療・社会保障をはじめ、年金・介護・福祉など幅広い分野で良質な情報・サービスを提供してまいりました。

永年にわたり培われた信頼と実績をもとに、みなさまの「健康寿命」の延伸と「クオリティ・オブ・ライフ（生活の質）」の向上を積極的に支援しています。



● ベストドクターズ事業

ハーバード大学医学部教授により1989年に創業したベストドクターズ社のもと開始、2002年に日本に進出した事業です。現在は、2017年に合併した米テラドックヘルス社のもと鋭意展開されています。テラドックヘルスは、一般的な医療相談から重篤疾患、身体疾患からメンタルヘルスにいたる一般向けサービスのほか、医療機関向けのデバイスまで幅広い仮想ヘルスケアソリューションを提供する、ニューヨーク証券取引所上場企業です。日本では、「ベストな医師＝Best Doctors in Japan」のご照会を柱とした各種サービスのほか、医療機関向けデバイスを提供しています。

ベストドクターズ記念盾

ご選出記念盾に関するお問い合わせが増え個別のご対応が難しくなりましたため、本誌にて概要をご案内させていただきます。お問い合わせ、ご購入につきましては、お手数ですが、下記メールアドレス宛にご連絡ください。折り返しご案内をお送り申し上げます。

なお、2022年5月1日お承り分より新デザイン（右下の画像に準じたデザイン）にリニューアルしております。材質に変更はございません。また、従前どおり、過去のご選出年度（2022-2023、2020-2021、2018-2019、2016-2017、2014-2015、2012-2013、2010-2011、2008-2009、2006-2007）でもお承り可能です。過去の選出年度の盾も、新デザインになります。

記念盾はオーダーメイドの性質上、注文主様・送付先様のご都合による返品・交換・ご注文後のキャンセルはお受けできません。あらかじめご理解の上ご注文いただきますようお願いいたします。

【仕様】木目調枠 縦約33cm×横約28cm 重さ約1kg

【価格】34,000円（送料込・税別）

【納期】お申し込み後8週間程度

氏名欄に記載する肩書き、学位は「Dr.」「M.D.」「Prof.」「M.D.,Ph.D.」等からご選択いただけます。

e-mail : tate@bestdoctors.jp (bestdoctorsには末尾に「s」がつきます)



本誌『BEST DOCTORS IN JAPAN』のバックナンバーがご覧いただけます。 <https://bestdoctors.com/japan/newsletters/>

Teladoc
HEALTH

 **Best Doctors®**

本誌は著作権法上の保護を受けています。本誌の一部あるいは全部について、株式会社法研および Best Doctors, Inc. から文書による許諾を得ずに、いかなる方法においても無断で複製、複製、転載することは禁じられています。

日本総代理店 株式会社 法研

〒104-8104 東京都中央区銀座1-10-1 Tel.03(3562)8404

<https://www.sociohealth.co.jp/>

<https://bestdoctors.com/japan/>

Best Doctors、star-in-cross ロゴ、ベストドクターズ、Best Doctors in Japanは、米国およびその他の国におけるBest Doctors, Inc. の商標です。Best Doctors, Inc. は、Teladoc Health, Inc. およびTeladoc Health International, S.A.U.の一員です。Teladoc Health、Teladoc および TeladocロゴはTeladoc Health, Inc. の商標です。